

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(44) 西洋哲学は煩惱の解脱に役立つか

現在、企業に働く中高年の人が受講したいセミナーとして、哲学・倫理学に高い人気がある。この人達は、現在の企業の厳しい現実の中で心の悩みを解脱したいと考えている。しかし、この哲学・倫理学といった場合、多くの人は西洋のものを考えているのであろうが、これらを学んでも失望する。

西洋の諺に「哲学者は、日頃偉そうなことを言っているが、自分の歯痛を我慢することすらできない」というものがある。これは、西洋哲学・倫理の苦痛に対する効能をよく示している。結局、西洋哲学・倫理学も他の西洋の自然科学・社会科学と同じく論理的思考方法を適用したものである。理性脳の働きである論理的思考方法は心の悩みに対しては、「百害あっても一利もない」とまでは言わないが、あまり効果はないのである。むしろ、東洋哲学、特に仏教の哲学には、論理を超えた体験的直観による心の悩みの解決を示しているものがあるのである。

前の項で詳しく述べたように、カントの道德律にしても、「もっとも道德的なことは、性向ではなく義務感を以て行うことである。」という素晴らしい考えであるが、それで人間の煩惱は解脱するかというと、難しいことである。ケチな人が義務感で貧しい人に金を恵むことは、非常に道德的であると理解できても、それでそのケチな人は心の満足が得られるかというと苦痛は残る。人間は理屈で分かっているが、感情として納得できないことが多いから、心の葛藤が起こる。そして、理屈で感情を押し殺そうとすればするほど、内攻して心の葛藤は深まる。しかし、西洋哲学は、論理・理性の世界であるから、「道德的であるから、行うべきであり、納得すべきである。」で終わっているのである。

ひるがえって、哲学とは何であるかを、広辞苑で引いてみると、「世界・人生の根本原理を追求する学問」と出ている。世界・人生の根本原理には、頭で理解する、言ってみれば、頭の哲学により解明する原理と、心で理解する心の哲

学により解明する原理があるのである。そして、西洋の哲学は、非常に深いのであるが、頭の哲学なのである。他方、東洋の哲学、特に仏教は、頭の哲学も含んでいるが、特徴としては、心の哲学に重点を置いているのである。そして、煩惱の解脱のためには、頭の哲学も、多少寄与するが、主として、心の哲学が非常に効力を発揮するのである。

これを短歌にすると、次のようになる、

西洋の 頭の哲学 深けれど 煩惱癒すは 心の哲学

従って、西洋哲学・倫理学は、煩惱の解脱に関係することは、あまりテーマとして取り上げていないのである。他の項でも述べたように、もちろん、ヘーゲルの認識論のように、煩惱の解脱に多少役立つものがあったとしても、それは認識論を読んだ人が、自分で考えて初めて役に立つことなのである。認識論自体は、煩惱の解脱とは関係のないことである。むしろ、西洋における煩惱解脱に関係するものは、キリスト教である。煩惱解脱の観点からすると、西洋哲学書よりは聖書を読む方がましである。しかし、東洋哲学、特に、仏教の方が、煩惱の解脱を直接的にテーマとして取り上げている。

それとともに、キリスト教の聖書は、ものの考え方において良いことを教えているのであるが、煩惱解脱に役立つかについては、かなり疑問がある。例えば、「右の頬を打たれたならば、左の頬を出しなさい」とか、「愛されることを求めるのではなく、愛することを求めなさい」ということが書かれている。これらの言葉の意味するものは、素晴らしく、これらを実践できる人は、高潔な人物である。しかし、通常、人がこれを実践できるかということ、甚だしく疑問である。なぜならば、これらを実践する時には、大きな心の苦痛・抵抗が生じるからである。この苦痛に対して、どのように対処するかを示していない。ここが、キリスト教においてもやはり限界のあるところなのである。

結局、煩惱の解脱の根本的真理は、苦痛を噛みしめ味わい更には強めることであることを銘記しておく必要がある。

前述のことを短歌にすると、次のようになる。

哲学者 日ごろ偉そうに 言うけれど
己の歯痛 耐えることなし